

市史通信

【目次】

- 横浜市児童体育大会と市民精神作興の歌
- 横浜ユナイテッド・クラブの戦後
- 写真でみる昭和の横浜①
中区役所
- 所蔵資料紹介
- 市史資料室たより



小学校児童の合同体操(横浜小学校) 1929年4月
アルバム「[昭和4年 天皇行幸]」より(横浜市史資料室所蔵)

第2号

【発行日】2008年8月8日
【編集・発行】横浜市史資料室
〒220-0032
横浜市西区老松町1番地
横浜中央図書館・地下1階
【電話】045-251-3260
【FAX】045-251-7321
【E-mail】
gy-sisi@city.yokohama.jp
【ホームページ】
<http://www.city.yokohama.jp/me/gyousei/housei/sisi/>

横浜市児童体育大会と 市民精神作興の歌

昭和初期は、学校教育・社会教育の中で、軍人となるべく健康・体力増強が重要視された。そのなかで、ラジオ体操をはじめとした、様々な体操が校現場や地域に取り入れられ、また、作り出された。そのような体操のなかで、多くの人数で行う合同体操は、規律ある団体行動を養うためにも活発に行われ、各学校の運動会や市の体育大会において披露されてきた。

ここでは、大正時代末に始められた横浜市小学校児童体育大会(競技への参加児童は、基本的に高等科も含む尋常科六年以上)について概要を紹介し、そのなかで行われた合同体操、特に精神作興合同体操とそれにつかわれた「市民精神作興の歌」を紹介する。

一、児童体育大会のはじまり

児童体育大会の第一回は、一九二四(大正一三年)一月三日に横浜商業学校の校庭で開催された(『毎朝』24・11・4、以下同記事による)。この第一回の大会は、小学校児童だけでなく、中等学校・青年団・修養団が参加して行われており、後の市民体育大会と児童体育大会を合わせた大会であった。大会が行われた一月三日は、同年から「全国体育デー」となっており、その催し

として行われた。もともと、渡辺市長の挨拶に「昨年この催しを企画したが震災があつたため挙行できなかつた」とあるように、前年に初めて計画されていたようだ。

競技は、主にトラック・フィールドの陸上競技で、小学生は一〇〇メートル・二〇〇メートル・四〇〇メートル・八〇〇メートル・八〇〇リレー、走り幅跳び・走り高跳び・砲丸投げが行われた。そのほかに、バスケットボール(大島小学校尋常六年と高等一年との試合、YMCA選手の試合)、小学生の参加はないが相撲・柔道・剣道が行われた。青年団の八〇〇メートルリレーでは、選手規定に反しているものがあるとの指摘から数十分もみ合いになるなど、地域の対抗意識などから白熱した大会であつたようである。

第二回は、一九二五(大正一四年)一月七日、横浜公園運動場において行われ、小学校児童の大会となつた(『毎朝』25・11・8)。この年から、バレーボールが競技に加わつた。また、各学校一学級ずつの学級別体操が行われている。しかし、横浜市教育研究会体育調査部会における批評では「体操は学級別とせず『マースゲーム』に改めたし」と言われている(『紀要』四)。そのため、翌年の第三回には、学級体操がなくなり、合同体操と合同遊戯が行われるようになった(『毎朝』26・11・7)。その後、一九二七年第四回大会では、「小学校の課業時間中行はれつ、ある体育の事柄



昭和初期の横浜公園球場

(横浜市史資料室所蔵)

次のように書いて
いる。

「元来体育愛を勃興せしむるには競技会の形を以てする事もあり。又競争に余り重きを置かざる所謂運動会の形を以てする事も出来るのであるが而して何れにも一長一短はあるのである。本年本市の採りたる方法は以上の二者を併合したるものであつて而も小学校の体操科として課業時間及び放課時間に行はれて居る事柄を如実に行ひ且つ其の輪郭を拡大し色彩を鮮にして其処に参

二、競技の変遷

児童体育大会における競技は、基本的に第一回から変わらず、陸上競技(トラック・フィールド)、バスケットボール、第二回から加わったバレーボール、第三回からは合同体操・合同遊戯が加わった。その後、一九三二(昭和七年)からは、バスケットボール・バレーボールが分離して大会が独立して行われるようになり、陸上競技と合同体操などの合同競技の大会となった。

陸上競技では、職員競技を除くと、二七(昭和二年)頃は、トラック競技は、五〇メートル(女)、一〇〇メートル(男女)、二〇〇メートル(男)、八〇〇メートル(男)、四〇〇リレー(女)、八〇〇リレー(男)となり、以後、一九三四(昭和九年)第一回大会まで変わらなかつたが、三五年第一二回大会では、二〇〇メートルが無くなり一五〇メートル(男)となり、四〇〇リレーが三〇〇リレー、八〇〇リレーが六〇〇リレー、三〇〇リレーの特別競走(決勝)が三六〇リレーとなり、別に尋常科男子の三六〇リレーも行われた(各年「プログラム」)。三七(昭和一二)年第一四回大会からは、女子の六〇メートル、三六〇リレー、男子の一〇〇メートル、三六〇リレー(尋常)、六〇〇リレー(高等科)となり、各競技の決勝にあたる特別競走は行われなくなった(『紀要』一六など)。

この年は、日中戦争の最中であり、入場式では初めて市長による閲団(実際は代理の鶴沢助役)、宮城遙拝が行われ、「入場式、閲団も時局に鑑みての初の試みであり児童で埋まる内野、外野両スタンドの数ヶ所には『国威宣揚』『武運長久』の長旗が風になびき刻々進めるプログラムも非常時色濃厚で時局にふさはしい(『読売』38・11・3夕)と報道されている。翌三八(昭和一二)年には、戦死者に対する黙祷も行われた(『プログラム』)。

フィールド競技では、三八年までは一貫して走り高跳び(男)、走り幅跳び、三段跳びが行われている。

それ以後は、不明な点も多いが、三九(昭和一四)年には「競技は四百米、八百米リレーを中心とした団体競技に終始し(『神奈川読売』39・11・3夕)と報道されているようにリレー競技だけとなり(四〇年には八〇〇と一六〇〇リレー、『横濱』40・10・26)、フィールド競技は行われなくなったようである。それに代わり、次で述べる合同体操・合同遊戯のプログラムが増加してくる。

ところで三九年は、四月に都筑郡・鎌倉郡の一六町村を合併したが、児童体育大会は旧市内七四校によって行われ、新市域の学校は参加することはなかった。

一九四一(昭和一六)年からは、児童体育大会は大きく変化し、集団運動部大会と陸上競技部大会とに分離した(『概要』一七年度)。陸上競技部は、各隣校組地区において開く隣校組大会、それ

を現はしたい為め「体操、遊戯、教練の何れにてもよし」として学級体操は再開されたが、「時間の関係上一回に八校宛行つたので出場者も観衆も共に落付く暇のなかつた事は甚だ遺憾である(『紀要』一六)として、結局、時間の関係で次年度からは行われなくなった。

ところで、一九二七(昭和二)年第四回大会は、四月に、横浜市と周辺の町村とが合併し、人口が一〇万人以上増加し、学校数も増加したなかで行われた。横浜市教育研究会は、同年の大会総括の中で、この大会の目的・意義を

集したる父兄市民及び児童自身をして学校体育を理解し之れに響鳴せしめ併せて体育愛を喚起せしむる事に努めたのである。」(『紀要』一六)

このように、児童体育大会は、競争に重きを置く「競技会」と余り重きを置かない「運動会」を合わせたものであり、また、学校の授業や課外活動でおこなっていることの発表の場であり、これにより「体育愛」を喚起しようとするものであった。

二九年からは、新装なった横浜公園球場において行われるようになった。

の優勝者を集めて開く中央大会になり、六〇メートル・一〇〇メートル走などのトラック競技や走り幅跳びなどのフィールド競技のほか、「短棒投」・「重量運搬」・「手榴弾投」・「籠球投」などが行われている。

集団運動部大会は、一〇月二三日に横浜公園運動場において行われた。参加範囲は、中区・神奈川区・保土ヶ谷区・磯子区で、鶴見区・戸塚区・港北区は別に大会が開かれた。鶴見区などの大会は、各区ともに同月二二日、鶴見区は花月園、戸塚区は戸塚国民学校、港北区は都田国民学校での開催が予定されていた(『神奈川読売』41・10・21)。競技は、八〇〇リレー以外は、合同体操や武道などが行われた。その他、同年からは相撲部大会も行われるようになった。

翌四二年は区ごとの大会と陸上競技部、相撲部大会となり(『神奈川』42・10・14)、四三(昭和一八)年以降行われなくなった。

三、合同体操・合同遊戯

合同体操・合同遊戯は、先に見たように、一九二六(大正一五)年から学級別体操に代わって始められた。この合同体操・合同遊戯について、二七(昭和二年)第四回大会の概要の中で、次のように説明されている。

「合同体操及び合同遊戯は昨年よりして本市には盛大に行はれつゝ、あるのである。此の体操法は、大勢の秩序整

然たる共同が如何に莊嚴なる威力を現すかを体得せしむるに最も価値あるものであつて、出場者も観衆も共に共に体育の壮美に魅せしめられるのも此れである。尚ほ此の合同体操は、社会生活に最も必要な規律共同の精神涵養及び国民精神作興に利あるものとせられて居るのであつて、現今ソール運動の形式が諸外国に歓迎せられつゝ、あるのも此の理由によるのである。以上の理由に依りて本年は高男の合同体操を増加したのである。」(『紀要』六)。このように、大勢による整然とした秩序で行われる体操は、規律ある共同生活の精神涵養、国民精神の作興に利するものだという理由で行われていた。

児童体育大会では、合同体操は男子合同遊戯は女子によって行われ、体操は「元気ある呼称と共に整然として動作」するもので、遊戯は「気持のよい楽隊の音と全く調和したる軽快なる動作」をするものであった。

二七年では、合同体操は尋常科が四〇校一六〇〇名、高等科が三七校一四一〇名によりそれぞれ行われ、合同遊戯は尋常科四〇校一六〇〇名で「君が代マーチ」を使って行われた。合同遊戯は翌年から高等科も加わり二種類となった。

合同遊戯では、二八年には「君が代マーチ」「女神の集ひ」が使われたが、その後、「横浜市歌」が使われるようになる。これは、当時の児童の記憶に残っており、個々の小学校の運動会におけ

る記憶が主だが、青木小学校の一九三二(昭和七)・三三年頃の思い出を書いたもの(『青木百年』四二頁や、四五(昭和二〇)年金沢国民学校卒の方の思い出(『かなざわ』七八頁)にも登場する。一九二九(昭和四)年には、後で見る「精神作興合同体操」が加わり、合同体操二種類、合同遊戯二種類と体操操で五種類の合同競技が行われるようになった。

一九三三(昭和八)年からは、これらに加えて、新たに「詩武」を行うようになった。「詩武」は「一千五百名の男女生軍がさしこの稽古着、袴、うしろ鉢巻の扮装に、片手に木刀、片手に日の丸の扇子、堂々と隊伍を組んでグラウンドに陣を張つた壯観、今島指導員の号令一下、川中島の詩を吟ずればさはらば斬らんの風情よろしく剣舞の快よさ、青空の下、響く陣太鼓に気合も雄々しくひと、きを緊張させて終つた」(『横濱』33・10・27)というように、詩吟に合わせて合同で剣舞をするというものであった。

三八(昭和一三)年第一五回大会になると、合同遊戯が尋常科・高等科それぞれ二回となり、尋常科では、合同遊戯及斉唱(遊戯「横浜市歌」斉唱「横浜行進曲」、合同遊戯「愛国行進曲」)を、高等科は合同遊戯「田毎の月」と合同遊戯及斉唱(遊戯「田毎の月」斉唱「東亜の盟主」)を行った。また、合同体操にも斉唱が付き、尋常科は体操「徒手体操」斉唱「空の荒鷲」を、高

等科は体操「一聯の体操」斉唱「少年民愛国歌」を行った(『プログラム』)。三九(昭和一四)年には「少年剣道」(尋常科・高男)が加わり、四〇(昭和一五)年には、競技の最初に尋常科・高等科全員による建国体操が行われるようになる。建国体操は、三七年に発表されたラジオ体操などと同種の体操で、警保局長などを勤めた松本学によって強力に流布された。横浜市内では松本に私淑していたといわれる伊勢佐木警察署長により広められた(藤野豊「横浜市における建国体操の展開」)。このように、戦時期になると合同競技の割合が高くなってきている。

また、同年の大会は、紀元二千六百年奉祝として行われた大会で、合同遊戯では、「奉祝国民歌紀元二千六百年」(「紀元二千六百年頌歌」が使用された。と)と、三九(昭和一四)年に追加されたものに「寄せ運動」がある。寄せ運動は、青木周三市長が「莞爾として困苦に堪へ得る市民養成のために青年学校に於ては気魄の教育、小学校に於ては意志教育の徹底を提唱」して、自身の郷里である山口県旧毛利藩で行われていた「寄せ勝」を導入したものである(『寄せ運動』、以下同資料)。寄せ運動は、寄せ手一人、数人、寄せ子一五人以上、鞆たもとを使用して、戦闘始めの号令で競技を開始し、寄せ子は寄せ手の鞆が体のどこかに触れれば退き、寄せ手は面を打たれた時に退き、どちらかがいなくなった時に勝負が決まる

というものである。導入の最初は、大岡小・稲荷台小・三吉小で実地研究が行われ、その結果を見て、児童体育大会に採用されたものである（青木市長の意志教育については、『市史Ⅱ』一、一〇一頁参照）。

このように、建国体操や寄せ運動、少年剣道や薙刀など、時局に対応した競技が追加されていった。

四、精神作興合同体操

合同体操のなかで、一九二九（昭和四）年に始められた精神作興合同体操は、「教化総動員計画の試みとして二万の児童全部が出場『精神作興歌』を合唱して雄大なる合同体操を行ふので大会の一大観として市民の興味を惹いてゐる」（『横賀』29・10・23）というものであり、新聞記事に大きく扱われた。同年、文部省が提唱した教化総動員運動は「国体観念を明徴にし、国民精神を作興すること。経済生活の改善をはかり、国力を培養すること」（『国史大辞典』）を目標とし、教化団体を作つて運動を進めていこうとするものであった。市教育研究会の説明でも「精神作



水島藤吉
（『復興記念横浜大博覧会誌』より）

興合同体操は合唱しながら合同体操を行ふものにして団体意識を最も強く明瞭に發揮せしめるのが特徴で然も動作と歌曲によりて市民的 spirit を作興せしめる様に仕組れたものである。総てが本市の考案であり全国最初の試みなる（『紀要』八）と「市民的 spirit の作興」を挙げている。

児童体育大会では、合同体操・合同遊戯に参加した児童の総てが参加することになっており、一人内外の児童が参加し、歌は観覧の児童が担当した。この合同体操に使われる歌が「精神作興の歌」である。後の報道では、作詞は教育課長の水島藤吉とされている（『横賀』32・10・22）。その歌詞は次の通りである。

精神作興の歌

一、災後星霜ここ七年

新装就りし横浜港

努力の跡を君見ずや

海に希望の波躍る

嬉し楽し楽し嬉し。

二、東洋一の貿易港

港の使命いや重し

重き使命に奮ひ起つ

我等の腕に血は躍る

奮ひ起たん、起たん奮え。

三、我等港の若人は

勤苦の盾に身を固め

進取の鋒を手にかざし

磨き養へ智と力

勉め励め励め勉め。

四、我等の負へる大使命

果すに何か難からん

いざや勉めん我友よ

いざや起たん吾友よ

勉め起たん、起たん勉め。

（『紀要』八）

歌詞は、関東大震災からの復興期である時代を反映したものとなっており、出だしの「災後星霜ここ七年」の「七年」は、毎年カウントされ、一〇より大きくなると「ここ」がとれた歌詞になったという（『横浜市教育史』下、二一二頁）。全体的には、港の復興、貿易港ということを前面に出した歌詞であった。この精神作興合同体操は、新聞に「壯観」「断然人気」などと報道され、毎年のように写真が掲載された。

しかし、体操については、実際どのようなものであったのかは、ほとんどわからない。当時の思い出を書いたものでは、「ツトメツ ハゲメツ ハゲメツ ツトメツ」とかけ声も勇ましくげんこで空や前方を突くのである（『青木百年』四一〜二頁）とあり、最後の部分が若干わかるのみである。

ところで、関東大震災からの復興が進み時間が経つてくると、様々なところで「震災離れ」が見られてくる。たとえば、一九二八（昭和三年）本格的な建物で開館した震災記念館は、三三年の関東防空大演習を機に、中に防空室が作られ爆弾の模型などが展示され（『東朝』33・9・10）、後には郷土教育のために、震災展示を縮小して「開港歴史館」

的展示をした方がよいとの意見も出されていた（『東朝』11・6・30）。

一方で、一九三七（昭和一二）年七月日中戦争が勃発し、九月から国民精神総動員運動が開始されるなど、次第に戦時色が強くなってきていた。

このような状況下において、「精神作興の歌」に替わって、新たに「市民精神作興の歌」が作られ、精神作興合同体操は新しい歌で行われるようになった。

市民精神作興の歌

（市教育課作詞作曲）

一、（市の誕生）

時代の鐘の高鳴りて

四海の波のさわぐ時

文化の光がやかに

わが日の本の新しき

強き生命をもたらし

生れし港都横浜市

二、（市の繁榮）

仰げ星霜八十の

努力のあとの功績を

大厦高樓軒に並み

出船入船賑しく

工業こゝに躍進し

大横浜の偉容成る

三、（愛市の高調）

世界の港横浜の

雄姿を胸に思ふとき

強く貴くうるはしき

愛市の念は漲りて

燃えなんとする向上の

一路に高く躍るなり



横浜市児童体育大会のプログラム
安室吉弥家資料(横浜市史資料室所蔵)

四、(市民の覚悟)

我等の若き横浜の

高き理想^(のたま)を身に負ひて

世界の港都横浜の

栄を永久^(とこ)に伝ふべく

額に汗のしづくして

さらば努めん諸共に

(昭和一三年『プログラム』)

これは、三八年児童体育大会のプログラムに掲載されたもので、この歌が使われた最初の年のプログラムは未見である。また、三七年一〇月一日の『横浜貿易新報』に報道された歌詞とは若干の違いがある。なお、ルビは同記事に、ひらがな書きになっていたものを付している。

この歌詞の特徴は、先の歌詞が震災復興がテーマであったのに対し、一番「四番に」市の誕生」「市の繁栄」「愛市

の高調「市民の覚悟」とあるように、横浜開港からの市の発展を語り、震災については触れられていない。また、貿易のことだけでなく工業も採り上げているなど、工業都市へと進んでいた横浜市の状況に合わせた歌詞となっている。

同年一月一〇日からは、国民精神総動員強調週間が設けられており、横浜市においても、そのなかで様々な行事が行われたが、一三日には国民精神作興市民体操祭が開かれ、児童四千人による精神作興合同体操がおこなわれた(『読売』37・11・14)。

五、運動会における合同体操・遊戯

児童体育大会で行われた合同体操・合同遊戯は、個々の学校における授業や課外活動として行われていたものであり、最初の披露の場はそれぞれの学校の運動会であった。そこで、各学校の運動会における合同体操・遊戯について、それぞれのプログラムによって簡単に見ておこう。

一九三三(昭和八)年において、プログラムを見ることができた三二校について見てみると(安室吉弥家資料五二一・五二二)、「精神作興合同体操」は、意外と少なく七校で行われているに過ぎない。単に「合同体操」と書かれている学校は一七校あり(うち複数回行われているところが七校、この中に含まれている可能性はあるが、児童体育大会の中心的な競技の割にはそれほど多くはない。合同遊戯は、プログラムに、単に「港」

「キューピーチャン」と書かれている学校が多く、どれが合同遊戯か判断しにくいものがあるが、「横浜市歌」は二〇校で行われており割合が高い。「市歌」を行う多くの学校は、同年度と次年度の児童体育大会の出場者年代である、五年六年の女子児童が行っている。他に、六年女子のみの場合や四年・六年女子などの学校もある。そのほか、主に高等科女子により行われた「港」が一六校あり、比較的多い種目であった。その他、様々な曲で合同遊戯が行われていた。

また、「体操」と書かれている種目は、ほとんどの学校にあり、全校で行うところが一〇校、その他も複数回を行っているところが多く、参加者全員が満遍なく行っている。いくつかの学校では、「ラジオ体操」「国民保健体操」と体操名が書かれている。

児童体育大会において、この年から行われるようになった「詩武」も運動会でも行われており、剣舞・演武をふくめると一三校で行われていた。

その他の競技では、五〇メートル・一〇〇メートルなどの「徒競走」「だるま送り」「棒倒し」「騎馬戦」等々、さまざまなお馴染みの競技が行われていた。

六、おわりに

そもその「市民精神作興の歌」を調べるきっかけは、昨年における、複数の市民の方からの問い合わせで、昭和初期のある歌について知りたいとい

うものであった。幸い問い合わせの中で、児童体育大会でその歌に合わせて体操を行ったというものがあり、歌詞が載っていた第一五回児童体育大会の「プログラム」を、問い合わせをした方に紹介することができた。この歌を調べる過程で、時期によって「精神作興合同体操」で使った歌が違ったことなどが判明したので、ここに紹介をすることにした。

しかし、問い合わせでは歌詞だけでなく楽譜についても知りたいということであったが、楽譜は残念ながら所蔵資料中から見つけられず、また、合同体操や合同遊戯の紹介であるにも拘わらず、実際の動きがほとんどわかっていないなど不明な点も多い。

【参考文献】(本文中略称は↓で示す)

『横浜市教育史』下巻(一九七八年)／『横浜市立小学校体育研究会史』(一九八七年)／『横浜スポーツ百年の歩み』(一九八九年)／『横浜市史Ⅱ』第一巻下(一九九六年)／『青木百年』(青木小学校創立百周年記念実行委員会、一九七三年)／『かなざわ』(金沢小学校)百十周年記念事業実行委員会、一九八四年)／藤野豊「横浜市における建国体操の展開」(『市史研究』こはま)第一二号、二〇〇〇年)／横浜市教育研究会『教育研究紀要』第三輯(第一六輯(一九二五)一九三八年)／『紀要』／『横浜市教育概要』昭和一七年度／『概要』／『横浜市立小学校児童体育大会』第八回、第拾回、第拾叁回、第拾貳回、第十三回、第十五回(一九三二、三三、三六、三八年、安室吉弥家資料五二六、九三三、九三四、五二七、六九二、五二九)／『プログラム』／『寄せ運動』(横浜市教育部、一九四〇年、半井清資料A-38-14)／『横浜毎朝新聞』／『毎朝』／『横浜貿易新報』／『横濱』／『東京朝日新聞』／『東朝』／『読売新聞』／『読売』(百瀬敏夫)